



## うす泥棒

金子彦二郎

それは、うつとうしく降りつゞいた梅雨まがひの雨が霽れあがつた初秋の一夜でした。

空气中のごみといふごみがすつかり拂ひきよめられた空は、澄んだ藍色のビロード張りのやうに見え、そこにはお日様の忘れ形見である星の子たちが、かはいゝ腫をかどやかしながら、無言のほゝゑみを交し合つてゐました。庭の面には、昨日今日やうく咲き初めた白萩が、ほの明るい星のともしびの下に、さらさらゆらいでゐます。スイツ・チョンくく

と馬追虫が、道草食はうとする馬を叱る馬方の舌打そつくりな聲で唄ひつゞけてゐます。

縁端から脚をぶらさげて、ふらふら振りながら、其足指でそこにうづくまつてゐるボチの耳先をつまんでは興がつてゐた日出夫さんは、馬追虫の獨唱が一段すむと、思ひついたやうに、側の小父さんを顧みて、

「小父さん、また面白いお話をきかせて……」  
と言ひました。小父さんは日出夫さんから、斯う言はれるとどうしても厭だと斷りきれないので。それほど此の日出夫さんを愛して



おました。それで早速「よし〜」と引きさうけてこんなお話をはじめました。

## 二

昔、あるところにお釜を盗まれたものがあつたとさ。ところで其の盗んだ者は近所に住んでゐる甍だといふ噂がたつたので、其の家へ行つて見ると、なアるほど、其の家の臺所にちやんと其のお釜があるぢやないか。それで其の盗まれた男が、眞赤になつて怒つて、「太い奴だ、この泥棒め。さあ、すなほに返せ。」

と言つて持ち歸らうとすると、

「これ何をする。このお釜は先祖傳來の私の家のお釜だ。この私を泥棒呼ばはりにして持つていかうするお前の方こそ泥棒だ、悪黨だ。」

とあべこべに怒鳴りつけて、どうしても返さうとはしません。それでね、ぢか談判ではとても埒が明かないことが分つたので、盗まれた人からたうとうお役所へ訴へ出たのさ。

中納言兼光公といふえらいお役人が捨ておけないので、二人を呼び出して厳しく取調べることになつたんだよ。で先づ盗まれた方の云ひ分を尋ねると、

「このお釜は、毎日私が使つてゐた品で、それを私の留守にこの甍めが盗んでいつたに相違ございません。」

と申立てた。すると、甍は甍で

「恐れながら申し上げます。御覽の通り、私はこのやうな足腰の立たない不具者で、兩手に下駄をはかせて、やつと體一つを運んでゐる者でございます。それがどうしてお



釜のやうな重い物を盗んで持つて行かれませう。此の黠を、どうぞよく御察し下さいませ。此のお釜は先祖代々私のうちに傳つてゐたものに毛頭相違ございません。それなのに、此の私が盗んだなどと讒言するとは、あんまり物の分らない仕方と申さねばなりません。さういふ悪者こそ、牢屋へでもぶちこんでうんと厳しく懲らしてやつて下さいませ。この通り、頭を地にすりつけてお願い申上げます。」

と、如何にも口惜しさうに、涙まで流してくどくどと申立てます。

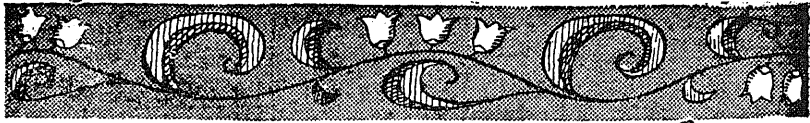
これにほ名判官中納言兼光公も、すつかり迷つておしまひになつたんだよ。「烏の雌、雄は誰にも見分がつかん。」といふ諺があるが、兼光公も丁度そんなもので、どちらの申立に

も理窟があつて、暫くは決しかねて、目をひつて考へ込んでいらつしやいましたが、流石は鬼と呼ばれてゐた名判官兼光公だ。すつかりよい腹案が胸中に出來あがつたと見えて靜かに目をあけると、じろりと稻妻のやうな鋭い視線を平伏してゐる甍の方に向けてから前と打つて變つたお優しい聲で、

「これ、甍、どうもお前の申立の方が筋道がたつてゐるやうだ。そのお釜にはうつたへ出た男の名前でも彫りつけてあれば格別こりやお前の物に違ひなからう。安心してさあ〜さつさと持歸つたがよからうぞ。」

とお申し渡しになつたのさ。納らないのは盗まれた男の方、

「お役人さま、そ、そんな無茶なお裁判があるもんですか、甍が何と申上げませうと



も、その釜は私の……………」

とわめきたててゐる。

「これ〜、控へろ〜。控へろと申すに。」

とおごそかにたしなめていらつしやる兼光公の聲を小氣味よささうに聞き流しながら、壁

は「ありがたい〜。どりや、然らば引き

さがるとしようか。」

と、また二三度ペコ〜とお辭儀をしてから、

「どつこいしよ。」とかけ聲しながら其のお釜

を頭にかぶつて……………」

小父さんのお話が、この邊まで來ると、さ

つきから相變らずぶらさげた脚の先でポチに

からかいながらおとなしく聞いてゐた日出夫

さんは、足もとのポチが飛びあがり、小父さ

んもびつくりするほど大きな、さうして重々

しい口ぶりで、

「こら待て、ゐざり。釜ぬす人は其の方に  
きまつたぞ。」

と怒鳴りつけて、アハハハ…………と大笑ひしま  
した。

「なアーんだ。日出夫も、このお話を知つ  
てゐたのか。人が悪いなあ。知らん顔をし  
て、私におしまひまで骨折らせてしゃべら  
せるなんて。だが、今の事こら待てゐざり

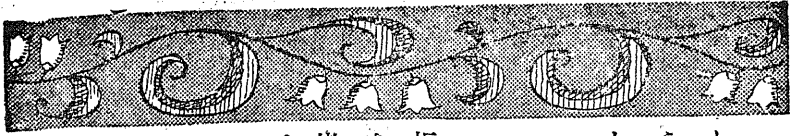
…………」は上出來だつたぞ。いや、もうすん  
でも耳がとんぼがへりするところだつた

よ…………。ようし、それぢや、今度は名譽  
恢復のため、搗きたての餅のやうな新鮮で、

柔くて、面白いお話をしてあげようか。：

…「なに、また徹が生えたお話ぢやないか  
つて? どうして〜、だつてほら、つい

ささがた讀んだ夕刊に出てゐた珍談なんだ



もの……いいかえ？」

と、かう言つた小父さんは、日出夫が大きくなづいたのを見て、次のやうに語り出しました。

### 三

時は昭和三年といふ御大禮の行はれようといふち目出たい年のこと、場所は東京市外の板橋町。初夏の或朝のこと。餅屋の吉川爲吉さんは、今日も朝の四時頃から跳ね起きて仕掛けた蒸籠の餅米がすつかり蒸しあがつたので、午前七時ころ

「やれ、また一臼搗きませうか。

月の世界の兎ちやんに。

負けてはならぬべつたんこ。

べつたら、べつたら、べつたんこ。

あいしいお餅を搗きませう。」

などと口から出任せの童謡を小聲でうたひながら、ねぢ鉢巻をきりつと結んで、いつも店頭の隅に寝かせてある臼と杵の支度にと出て行きました。

が、まもなく「べつたら、べつたら……」

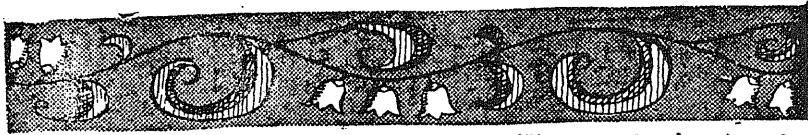
といふ童謡の節が、

「やつ、こりや變だぞ！ 臼が無い！」

と言ふ頓驚な叫び聲にかはりました。この爲吉さんの叫び聲で奥から走り出て來た内儀さんから小僧までみんなで店頭や背戸から露路まで残る隈なく探し廻りましたが、どうにもかうにも行方が知れません。

「昨夜戸締りをする時、たしかに何時ものやうに此所にあつたんだが、不思議なこともあるもの……」

と爲吉さんは、腕組をし直して見たり、解



て見たりして考へ込んでゐましたが、どうにも合點がゆかない。何はともあれ、大事なく、商賣道具がなくなつては、第一もう蒸し上つてゐる蒸籠の中の餅米の始末にも困る。

で早速、それは餘所から借りて來て、一時、間に合せることとして、其の仕事のかたがついてしまふと早速警察署へ訴へ出ました。

お巡りさん達も、その訴を聞いたときには、「盗む品物もあらうものを、あんな大きな餅搗臼を盗んでいつてどうしようと言ふんだらう。第一運んでいきやうがないぢやないか。誰かが悪戯をして、どこかに隠してましたんぢやないかな。」

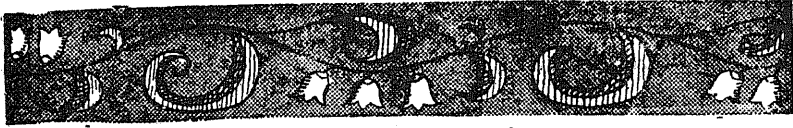
と言つて笑つてゐましたが、爲吉さんの申立てで、どうでも泥棒の仕業に違ひないといふ見極めがついたので、それにしてもあんな嵩

ばつた重いものを、大鐘をひきずつていつた辨慶のやうな力持でない限り、さうく遠くへ運べる筈もなからうといふので、數人のお巡りさんが、手分けして、町内を

「迷い子の迷い子の餅つき臼やあい。く。く。」と探し廻りました。

すると其の日の午後三時ごろ、一人のお巡りさんが、爲吉さんの家から三四町はなれた或家の軒下に、それかと思はれる臼が一つ据ゑてあり、さうして其の上には病身らしい一人の男が腰かけて、へんな目つきであたりをじろじろ見廻して居るのを發見しました。

で、これが盗まれた臼に違ひないと見當をつけたお巡りさんは、「一寸取り調べたいことがあるから一緒に來るやうに」と言つて、其の男を臼と一緒に警察に連れ寄せました。



x

やがて署長さんが、其の男を一室へ連れて  
いつていろいろと尋ねて見ました。

「お前だらう、あの白を盗んでいつたのは？  
素直に白状せよ。」

と言ふ問ひに、其の男はあはれつばい、か細  
い聲を出して、

「どう致しまして。私は三年前から病氣に  
かかり、二年前に家内に逃げられ、唯今で  
はこんな食ふや食はずの病みほうけた姿で  
今年三つになる娘と細い煙を立てながら、  
やつと暮してゐる身でございます。御覽の  
通り、思ふやうにも動けないからだで、ど  
うしてこんな大きな重い白なんか盗んで  
行けませうか。且那もあんまりひどいと思  
ひます。」

と言つて泣顔をして見せました。それで署長  
さんが、

「そりや氣の毒だつたな、それはさうと白  
は前からお前の持物に相違ないのか。」

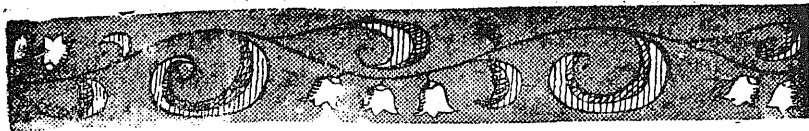
と言ふと、

「へえ、ええ、あれははつきり、私の持物  
ときまつてゐるわけでも御座いませんが、

……その……誰かゝあそこに置いてあつた  
もんですから……」

と、何だか要領を得たやうな、得ないやうな  
物言ひをするので、ここまで聽いて來た署長  
さんは、急に優しい笑顔になつて、

「うゝむ、よしよし、よくわかつた。誰の  
物といふ主のきまつてゐない白なら仕方が  
ない。此の白は當然お前のものだ。もうい  
いから此の白を持つて歸るがよい。」



かう言ひながらも署長さんは、署長室の方へ  
すうつと引きあげていつてしまつた。最敬禮  
をしてから後を見送つてゐた其の男は、

「やれ〜、きはどいところで助かつた。

有りがたい〜、これでこの白も、天下晴  
れて私の物になつたといふもんだ。さて  
〜又も御意の變らぬうちに、善は急げぢ  
や、引上げるとしよう。」

と病弱の頬にニツと崩れさうな笑顔を作りな  
がら、臼の側へにじりより、さて解放された  
うれしさで、病人らしく屈つてゐる腰を一つ  
ランと伸ばしてから、大きな臼をごろりと横  
倒しにして、コロ〜〜と警察の前庭  
を苦もなく轉がし終つて、今やまさに通用口  
のところを出離れようとした一刹那、

「こら待てッ！」

といふ破鐘われがねのやうな大喝。

ぎよつとして立ちすくんで振りかへつたそ  
こには、さつきの署長さんが、眼を光らして  
仁王立ちに突立つてゐた。

「不屈者奴が。永の頬で臼も動かせないな  
どと、よくも白々しいことを吐かしをつた  
な。まだ白状せんか。」

「恐れ入りました。實は……」

と、其の男はへな〜とへたばつて庭の片隅  
に小さくなつてゐた。

#### 四

小父さんが、つい話に夢中になつて、「不屈  
者奴が……」の所を思はず怒鳴りつけるやう  
な大聲を出したので、今度は、日出夫さんが  
手を拍いて「いよう署長さん」と囃し立て  
た其の大笑で、お話がおしまひになりました。  
間もなく、其の白が爲吉さんの店頭に再びど  
つかと坐つてゐたことは勿論であります(完)